

漢方医学の基本

放射線診断医師 西村 玄

筆者は画像診断が専門の典型的な西洋医ですが、最近身内が受けた漢方処方が劇的な効果を示したことをきっかけとして、漢方医のかたからその基本的な考えについて話しを聞く機会をえました。以下、その内容を筆者のコメントを含めて紹介します。



漢方医学は、中国伝統医学をもとに日本で独自に発展したものだそうです。漢方では、健康のレベルは高い状態から低い状態まで連続的で、そのレベルが低下すると病気の状態になると考えます。健康のレベルの低い状態（病気の予兆）を把握して、病気を予防、病気を早期の段階で適切に処置することを重要視します。健康のレベルが低下しているが、病気として発症していない状態を“未病”と呼びます。“未病”状態を考慮して治療にあたるのが基本だそうです。西洋医学にも予防という観点がありますが、疾患になる危険因子（コレステロールが高い、血圧が高い等）を減らすという姿勢しかありません。“未病”の把握と対処という点で、西洋医学は遅れをとっているようです。

漢方医学の治療対象は抽象的な病気概念（疾患単位）ではなく、病気に悩んでいる患者個人であるということが基本理念だそうです。治療に際し個人差を重視する。個人差を把握するために、西洋医学にはない舌診、脈診、腹診を用います。漢方医学独自の診察法によって症状を把握し、複数の症状の相互関係を確認して具体的な処方を決定していきます。個人にそくした治療方針を考えるため、病気は同じでも用いる処方異なります。一方、西洋医学は、疾患単位という概念に患者をあてはめて一律に治療をします。しかし、効果は決して一律ではありません。同じ疾患単位であるにもかかわらず、標準治療が全く無効のことさえあります。個人差を遺伝子の差で推測することが西洋医学でも試みられていますが、漢方医学におよばないようです。

漢方医学の診断は“証”を判断することだそうです。“証”とは患者が示す病態全体を捉えたものであり、治療手段をも含めた概念です。患者の治療のためにある薬剤が適切と判断した場合、その患者はその薬剤の“証”であるといいます。病名を診断して病名を決めてから治療法を決定する西洋医学とは対照的です。実際に西洋医学の疾患単位に当てはまらない診断不明の、しかし、重篤な症状のある例は多々あります。個々人に効果的な対症療法を探すという点でも西洋医学はおよばないようです。



もちろん、漢方医学が無効な領域が多いのも事実です（例えば、進行した癌）。しかし、西洋医学の診療がいきづまった時に漢方医の対診を求めることは重要なことと考えます。

